

言

義

土木學會誌 第十一卷第二號 大正十四年四月

北上川筋降雨量出水最高水位の關係

(第十卷第五號所載)

會員 工學博士 中山秀三郎

洪水豫報の制定は吾國の如く河川に堤防多き處には水防上必要缺く可からざるものなるにも關せず發表されたるもの實施されたるもの少きを頗る遺憾に思ふものなり、會員並川工學士は『北上川筋降雨量出水最高水位の關係』と題し本會々誌第十卷第五號に發表されたるは大に歡迎すると共に著者の勞を感謝するところなり、以上の問題に就き次の點に關し指示されなば誠に幸なり。

著者は有效雨量の算定に初日、中日、終止日の3日間の雨量に各係數 a a' a'' を用ひられたり此の如くすれば有效雨量は實際の數量に最も近似し従て登米町量水標に現はるゝ算定水位と實際高水位との水位差を最少にするには頗る妙なるも終止日の雨量は翌日即ち第四日目の午前に觀測し報告するものなる故、豫報を發しそれに該當する高水位が登米町量水標に現はる迄の時差を少なくする點は遺憾なりと考ふところなり a'' は著者の分類されたる6個の内3つの場合迄は零となり居る爲め初日、中日の降雨状態及其量より終止日の降雨量を加減し初日中日の2日間の降雨量より豫報を發表する方法は試みられざりしや。

又有效雨量の算出に初日、中日、終止日の3日間を用ゆるとして其有效雨量に基因する流量を水位に換算する水位觀測所の位置を上流假令ば一の關附近の舞川か或は水澤附近の愛宕の如き觀測所を用ゆれば前者の場合には洪水波の波及する時間は登米町迄10時間位を要すべく、後者を用ゆれば20時間位を要するならん果して然らば時差はそれ丈増加さるべく高水位算出は上流對登米町量水標指示の水位關係より之を求め得可けん、其水位差は著者の採用せられたるものに比し誤差の多きは勿論なれども時差を多くする特點あり、然し上記量水標に於ける水位の

